

# フランス語母語話者の動詞時制習得調査と Beauzée の時制論

太 治 和 子

## 1. はじめに

2000年9月21日、伊藤誠宏先生のご指導のもと博士（文学）を授与された学位論文を、2002年3月、駿河台出版社から『Beauzée の時制論について — 18世紀百科全書の項目 <Tems> — 』として上梓した。Beauzée の時制論の特徴は、理論の出発点が過去・現在・未来といった時間概念ではなく、事行の展開アспектにあること、この観点から時制論全体を再考察すれば、従来特殊用法とされてきた前未来の様々な用法も統一的に説明できることを詳述した。

ところで、日本人フランス語学習者（大人になってから、主に第二外国語としてフランス語を学習する日本人を想定する）の抱える問題点のひとつに動詞アспектに関わるものがある。

例えば、

- まだお昼を食べていない。

\*Je ne déjeune pas encore. (← Je n'ai pas encore déjeuné.)

- 一日中、雨が降っていた。

\*Il pleuvait toute la journée. (← Il a plu toute la journée.)

\*のついた文は学生がしばしば犯す誤りで、正しくは右（ ）内のよう  
に言わなければならない。

それでは、フランス語を母語とする子どもはどうかであろうか。動  
詞時制習得に関して、日本人学習者との間で何か決定的な違いはないだ

ろうか。また、なぜフランス語ネイティブ教員は、半過去の様々な用法に関して、そのメカニズムを明確に説明出来ないことが多いのであろうか。大胆な仮説ではあるが、もしかしたら、母語話者は、半過去をまず過去時制として習得しないのではないだろうか。

こうした疑問を出発点として文献を調べ始めた結果、ネイティブの動詞時制の習得過程と Beauzée の時制論の間には意外な共通点が存在することが明らかになった。本稿は、動詞時制習得論および外国語教育現場からの Beauzée 時制論再評価の試みである。

## 2. Beauzée の時制・アスペクト理論

Beauzée の時制論の出発点は、時間ではなくアスペクトにある。もちろん、彼は「アスペクト」という用語を明確に用いたわけではないが、それでも、Wilmet は、Beauzée を「(フランス語における)アスペクトの真の発見者 *le véritable découvreur de l'aspect*<sup>1)</sup>」と評している。

彼は、まず動詞時制全体<sup>2)</sup>を、「基準時点より以前に起こった事柄を表すもの」、「基準時点と同時に起こり、展開中である事柄を表すもの」、「これから起こるであろうと予想される事柄を表すもの」の3つに分けた。すなわち、完了アスペクト、未完了アスペクト、予見アスペクトの3つである。

したがって、Beauzée の時制論の中では、現在形も半過去形もまず、未完了アスペクトに分類される。両者間で異なるのは、発話の基準時点(=時間)である。現在形で述べる時、話者は(特別なコンテクストがない限り)発話時に立つ。発話時とは、「今」という時点である。つまり、現在形とは「今」まさに目の前で展開されていることを述べる時制なのである。一方、半過去は話者の基準点が「過去」にある。話者は「過去」に立ちもどって、その時点で展開中である事柄を述べているのである。

---

1) Wilmet, M., *Grammaire critique du français*, Hachette /Duclot, 1997, p.310.

2) ここでは、直説法に限定して述べる。

すなわち、現在形と半過去の違いは、話者が「今」の時点に立って語っているか、あるいは「今ではない過去」の時点に立って語っているかの違いでしかない。

同様に、Beauzéeの時制論の中では、前未来も複合過去もまず、完了アスペクトに分類される。両者間で異なるのは、ここでもまた発話基準時点（＝時間）でしかない。複合過去は、現時点に立ってすでに完了している事柄を述べる時制であり、前未来は、未来の時点に立って完了事行を述べる時制である。すでに詳しく述べたように<sup>3)</sup>、前未来であらわされている事行は、すでに過去時に起こってしまっていることが多い。それでもなお話者が未来の時点に立って語る背景には、何らかの理由・発話戦略が存在するからであって、結果としてさまざまな文体効果（憤慨やいら立ちを強調する、現時点での断言を避け最終判断を保留する）も伴うことになる。前未来のあらゆる用法を統一的に説明するために Beauzéeの時制論はきわめて有効であることを我々は見てきた。

そのほかに、ある動詞の示す完了アスペクトに対し、さらにその時点より前に起こった事柄（過去の過去、すなわち、発話時点から見て2重の完了アスペクト）を示す複々合時制に関する Beauzéeの考え方を分析し、実例調査もあわせて行った<sup>4)</sup>。その際に、Beauzéeは、複々合過去の完全な活用表（代名動詞も含む）を示した最初の文法家であることもあわせて指摘した<sup>5)</sup>。

本稿では、現在形、半過去、複合過去に問題を絞って、母語話者の動詞時制習得過程と Beauzéeの時制論の考え方を比較検討してみたい。

3) Taji, K., «À propos du futur antérieur», *L'Information grammaticale*, 97, 2003, pp.37-40.

4) Taji, K., «Sur le passé surcomposé ou le passé du passé», 『仏語 仏文学』第34号、2008年、pp.193-222.

5) Cornu は、「Beauzée est le premier savant, à notre connaissance, qui ait établi le tableau intégral des formes surcomposées」と指摘している。(Cornu, M., *Les formes surcomposées en français*, Francke, Berne, 1953, p.74)。

Beauzée の理論にしたがえば、現在形と半過去は両者ともまず「同時性・未完了アスペクト」を表すのに対し、複合過去は「完了アスペクト」を表す。次に、現在形は発話時に展開中である事柄、半過去は過去の時点で展開中の事柄を示す。複合過去は「発話時で完了」している事柄を表すことから、「過去」の事行を示すことにもなる。子どもたちの動詞時制習得過程は、はたして大人と同じように「時間の観念（現在・過去）」から始まるのであろうか。

### 3. フランス語を母語とする子どもの動詞時制習得調査

#### 3.1. Ferreiro の調査

フランス語母語話者がどのようにして動詞時制を習得するのかについて書かれた文献は、今のところ多くない。Ferreiro<sup>6)</sup> は、二つの行為（同時、もしくは時間的に前後する）を子どもたちに見せて口頭で描写させ<sup>7)</sup>、その結果を分析した。時間の前後関係を示す語が現れ始める（たとえば、副詞 «après» の使用）のは5、6歳である。7、8歳頃になると、時の従属節 («quand» «avant que» «après que») が現れ始めるが、動詞の時制が時間関係を正確にあらわすようになるのは、8歳になってからである。

Ferreiro の調査で非常に興味深い結果が得られたのは、ある行為の展開途中で短時間で完了する別の行為が起こった場合であった。2つの行為は同時であったのにもかかわらず、子どもたちは、長時間かかったものに対しては現在形あるいは半過去を、短時間で終了した行為には複合過去形を用いたのである。例えば、

6) Ferreiro, E., *Les relations temporelles dans le langage de l'enfant*, Droz, Genève, 1971.

7) Ferreiro は、2つの行為のうち、2つ目の行為者を主語にして文章を始めるように指示した。この指示を守って2つの行為を描写することは、6歳までの子どもにあっては非常に難しい。

Chri. (4;6)<sup>8)</sup>: «Le garçon poussait le camion et le chat a renversé la bouteille.»

Jea. (4;7): «Il (garçon) pousse le camion, il (chat) a renversé la bouteille.»

Oli. (4;11): «Le garçon conduit le camion et puis le chat il a renversé la bouteille.»  
(Ferreiro, p.38)

以上のことから、Ferreiro は、現在形（及び半過去）と複合過去の使い分けは、幼児にあってはまずアスペクト機能（行為終了までに要する時間の長短、何らかの結果を伴うか否か、完了・未完了などを示す）を担うのではないかと仮定した。

nous croyons déceler ici une indication du fait que les temps des verbes sont liés plus précocement à ce que Hockett appelle «la distribution ou contour temporel» d'une action, plutôt qu'à sa «position dans le temps». Autrement dit, ils seraient liés à cette large catégorie de notions que les linguistes rassemblent sous le nom d'*aspect*.  
(Ferreiro, p.224)

その仮定の正当性を証明しようとしたのが、Bronckart<sup>9)</sup>である。

Ferreiro a surtout remarqué la systématique de l'opposition des temps du verbe ; aucun sujet n'a par exemple, choisi un *présent* pour l'action brève et un *passé composé* pour l'action longue. Bien qu'anecdotique (...), cette observation a néanmoins suscité l'hypothèse d'une fonction aspectuelle des temps du verbe, hypothèse dont nous avons voulu vérifier le bien-fondé dans le présent travail.  
(Bronckart, p.38)

8) ( ) 内の数値は、年齢である。いずれも 4 歳児であることに注意されたい。

9) Bronckart, J.-P., *Genèse et organisation des formes verbales chez l'enfant. De l'aspect au temps*, Dessart et Mardaga, Bruxelles, 1976.

### 3.2. Bronckart の調査

Ferreiro の調査結果をうけて、Bronckart は合計 6 つの実験を行った。

#### 3.2.1. 「実験 1」について

「実験 1」<sup>10)</sup> では、3 歳から 7 歳 11 カ月までの子ども 77 人を対象に、行為の結果としてなんらかの状況変化を伴う場面（9 つ）と伴わない場面（5 つ）を人形を使って示し、子どもたちにその様子を口頭で描写させた。具体的な行為内容は次の通りである。

#### 結果を伴う行為 actions résultatives

- 動作終了までにかかる時間は 1 秒
  1. 猫がピンをひっくり返す。（移動距離 0）
  2. シカが柵を飛び越える。（移動距離 10 センチ）
  3. スポーツカーが家に突っ込む。（移動距離 100 センチ）
- かかる時間は 5 秒
  4. 猿が犬をなで、犬が吠える。（移動距離 0）<sup>11)</sup>
  5. カメが家まで進む。（移動距離 10 センチ）
  6. 鳥が家の屋根に向かって飛ぶ。（移動距離 100 センチ）
- かかる時間は 10 秒
  7. 母親が赤ちゃんの体を洗う。（移動距離 0）<sup>11)</sup>
  8. 女性が車の方に移動する。（移動距離 10 センチ）

---

10) Bronckart は、「実験 1」で最も重要な結果が出たと考え、「実験 1」を詳細に報告・分析している。後に続く「実験 2～6」は参考資料として扱われ、その報告も短い。

11) 4 と 7 は、後の実験では「結果を伴わない行為」に分類されている。例えば、7 では、「きれいになった赤ちゃんの体」が結果として伴うが、その状態変化を子どもたちが行為結果として認識できるかどうかは別問題である。また、4 では、「猿が犬をなでる」行為と「犬が吠える」行為との間に必ずしも因果関係が存在するとは限らない。

9. 女性がベビーカーを家まで押す。(移動距離100センチ)

**結果を伴わない行為 actions non résultatives**

11. 魚が池を端から端までジグザグに泳ぐ。  
(持続時間 5 秒、移動距離30センチ)
12. カモが池を円を描いてぐるぐる泳ぐ。(持続時間10秒、円運動)
13. 馬が草原を円を描いてぐるぐる走る。(持続時間15秒、円運動)
14. コマがその場で回転する。(持続時間10秒、移動距離 0)
15. ボールが水に浮いている。(持続時間 5 秒、移動距離 0)

得られたサンプル数は1078、そのうち98例を除外<sup>12)</sup>し、980例を調査対象とした。使用動詞各時制の数値は、現在形531 (54%)、複合過去388 (39%)、半過去61 (7%)である。半過去の数値は少ないものの、現在形が多く用いられる際には半過去も現れ、逆に、現在形が使われなくなると半過去も姿を消すという傾向がみられた<sup>13)</sup>。子どもたちにとっては、現在形も半過去も同じアスペクトを示すものとして理解されるのかもしれない。

結果を伴う行為 1 と 2 に対しては、複合過去114例、現在形28例、(半過去は実例なし)が使われている。複合過去が多くの子どもたちによって選択されていることがわかる。逆に結果を伴わない行為11、12、15では、複合過去18例、現在形177.5例、半過去16.5例<sup>14)</sup>で、現在形および半過去が好まれている。1と2は、明らかな状態変化という結果を引き起こす。(1ではビンがひっくり返り、2では、シカは柵の向こう側に移動

12) 動詞を全く含まない文や結果状態だけを述べる文 «Il est sur la maison, le poussin» など、動作そのものを表さない発話文は調査対象から除外された。(Bronckart, pp.52-53)

13) 例外は、行為 4 である (現在形使用が全体の58%を占めるものの、半過去使用は 0 である)。

14) 同時に二つの時制が用いられた時は、それぞれ0.5例として計算した。(例えば、«La toupie tourne, la toupie tournait.») (Bronckart, p.53)

する。) これに対して、11、12、15では同じ行為が続くだけであり、何ら状態変化は知覚されないと考えられる。つまり、結果を伴うか伴わないかが、動詞時制の選択に大きな影響を与えていると結論される。

En première analyse, la présence ou l'absence d'un résultat semble donc exercer une grande influence sur le choix des temps du verbe.

(Bronckart, p.55)

動作の持続時間の方に注目すると、状態変化などの結果を引き起こす動作であっても、一瞬で完了する1～3に比べて5秒以上時間のかかる4～9では、現在形もしくは半過去が多く使われている<sup>15)</sup>。したがって、動作にかかる時間も同じく時制選択に影響を与えていると考えられる。

La durée semble donc elle aussi pertinente pour le choix des temps.

(Bronckart, p.55)

15) 1から15までのシチュエーションごとの動詞時制使用分布は次の通りである。

(Bronckart, p.55)

	複合過去	半過去	現在
1	83%	0	17%
2	77%	0	23%
3	54%	10%	36%
4	42%	0	58%
5	36%	10%	54%
6	52%	3 %	45%
7	32%	3 %	65%
8	36%	20%	44%
9	42%	10%	48%
11	12%	6 %	82%
12	9 %	9 %	82%
13	35%	4 %	61%
14	41%	3 %	56%
15	6 %	9 %	85%

また、年齢を細分して調査すると<sup>16)</sup>、動作が一瞬で完了する1と2においては、年齢にかかわらず常に複合過去の使用が優勢である。半過去の使用は、いずれの年齢においても、見られない。しかしながら、年齢が上がるにつれて、現在形の使用は増加する。

行為者の移動距離の長い3と6においては、1、2と同じ傾向（複合過去が優勢）が確認された。また、3歳から6歳までの間に例外的に半過去の使用が若干数みられた。

行為終了までにかかる時間が長い8と9では、4歳児グループでのみ、複合過去の使用が最も多い。しかしながら、それ以外のグループでは常に現在形使用がトップを占める。6歳までは、他のシチュエーションに比べて半過去使用が比較的多くみられるが、6歳を超えると、半過去の姿を消し、その代わりに現在形が使われるようになる。

同じく行為終了までに時間のかかる7では、5歳まで現在形より複合過去の方が頻繁に用いられているが、5歳を境にこの傾向は逆転し、7歳になると100%の子どもが現在形を選ぶようになる。

具体的な数値は載せられていないが<sup>17)</sup>、結果を伴わないシチュエーションの場合は、13と14は、7と同じ傾向を示している。11、12、15では、年齢にかかわらず現在形が最も多く用いられているが、その傾向は年齢が上がるにつれて強化される。

### 3.2.2. 「実験2」について

「実験2」では、人形を使って様々な場面を見せた後、7秒の間隔をおいてから実験内容を語るように指示した。結果は、上の「実験1」とほぼ同じである。状態変化という結果を伴う行為については一般的に複合過去が優勢ではあるが、6歳までは、動作にかかる時間が長いと現在形を用いる傾向が見られる。しかしながら、6歳以降になると、動作にか

16) Bronckart, p.65に、1～9までの年齢別動詞時制使用数値表がある。

17) Bronckart, p.67に、11～15の年齢別動詞時制使用変化グラフがある。

かる時間の長短は動詞時制選択に影響を与えなくなり、いずれの場合も複合過去が規則的に用いられるようになった<sup>18)</sup>。例えば、持続時間が10秒かかるシチュエーション（トラックが車をガレージのところまで押す）では、3歳児で複合過去を選択した者は全体の30%であったが、7歳を超えると80%以上の子どもが複合過去を選択するようになった。実験内容を見せられてから発話までに7秒の時間が経過することで、6歳を過ぎると過去時制が選択されるようになる。動詞時制の時間用法の定着であろうと思われる。

### 3.2.3. 「実験3」「実験4」について

「実験3」では、実験終了から報告までの間に、さらに長い25秒の時間経過を導入した。教室を2つ用意し（移動に約25秒かかる）、実験者Aが人形を使って子どもたちにシチュエーションを見せた後、子どもたちは隣の教室に移動して実験者Bに報告し、続いて、実験者Bが別のシチュエーションを見せ、子どもたちは再び隣の教室に戻って実験者Aに報告する。その繰り返しで、一連の実験は行われた。

用意した場面には、「実験1」から大幅な変更が加えられている<sup>19)</sup>。

---

18) Bronckart, p.99のグラフを参照。

19) 「実験1」と異なる点は以下の通りである。まず、結果を伴わない行為は、状態変化を想定できないもの *arésultatif* と、子どもによっては何らかの変化が認識される可能性のあるもの *non résultatif* に分けられた。例えば、9では、なでられた犬がしっぽを振るなどの行為、10では、白鳥の泳ぐ軌道が若干変わることなどが想定できる。また、動作終了までにかかる時間が長い行為は、「途切れることなく継続されたもの」と、「短時間の動作が繰り返されたもの」に分けられた。行為の内容や登場する人形も変更されている。例えば、「実験1」の「7. 母親が赤ちゃんの体を洗う。」や、「14. コマがその場で回転する。」、「15. ボールが水に浮いている。」などは、削除された。

### 結果を伴う行為 actions résultatives

1. 犬がピンをひっくり返す。(所要時間 1 秒、移動距離 0)
2. 馬が柵を飛び越える。(所要時間 1 秒、移動距離10センチ)
3. 車がガレージまで走る。(所要時間 1 秒、移動距離100センチ)
4. カメが家まで進む。(所要時間10秒、移動距離10センチ)
- 5.トラックが車をガレージまで押す。  
(所要時間10秒、移動距離100センチ)
6. 農夫が10個の柵を飛び越えて農場に到着する。(所要時間10秒、移動距離100センチ、短時間で終了する行為が繰り返される)

### 結果に結びつかない行為 actions arésultatives

7. 赤ちゃんが短い叫び声を上げる。(所要時間 1～2 秒)
8. 人形が長い叫び声を上げる。(所要時間 8 秒)

### 結果を伴わない行為 actions non résultatives

9. 猿が吠える犬をなでる。<sup>20)</sup>(所要時間 5 秒、移動距離 0)
10. 白鳥が池を泳ぐ。(所要時間10秒、円運動)

3歳から7歳までの子ども62人を対象にこの実験は行われた。3歳の子どものうち2人は、教室移動にかかる25秒が経過すると、実験内容そのものを忘れてしまい報告することが出来なかった。したがって、この2人は実験対象から除外し、60人を対象に分析が行われた。提示された行為の順番は、2、9、8、5、4、10、3、1、7、6である。25秒の時間が経過することで一つの大きな変化があらわれた。全体の3分の2の子どもが、すべての場面描写に終始一貫して一つの時制しか使わなかったことである。5歳までは複合過去を好んで用い、6歳になると現在形や半過去のみを用いる子どもも現れた。その原因として著者は、5歳までの子どもはまず教室を移動してから実験を思い出す(複合過去を

20) 「実験1」では、「4. 猿が吠える犬をなでる。」は、結果を伴う行為に分類されていたことに注意。(注11参照のこと。「実験1」の7. は削除された。)

用いる)が、6歳になるとその場で見たことをまず文章化し(現在形を用いる)、その文章を記憶しながら教室を移動するからだ、と考える。

以上の点を考慮したうえで、全体の傾向をまとめると次のようになる。1(複合過去83%、現在形14%、半過去3%)と2(複合過去80%、現在形17%、半過去3%)で最も頻繁に複合過去が使われており、10(複合過去38%、現在形37%、半過去25%)で現在形と半過去の割合が多い。「実験1」と比べて、明らかに半過去の割合が増えている。なお、半過去使用の多いシチュエーションは、10(25%)、4(17%)、8(13%)、6(12%)、5(10%)である。いずれも、動作終了までにかかった時間が長い。「実験1」や「実験2」では、現在形を用いる子どもが多かったが、25秒の時間が経過したことで、現在形に代わって半過去が使われるようになったと考えられる。

Avec le délai 25 (secondes), l'imparfait semble avoir pris la place du présent. (Bronckart, p.109)

年齢に注目すると、結果を伴う1～6においては、5歳まで複合過去が優位であるが、6歳を過ぎると、複合過去と現在形はほぼ半々になる<sup>21)</sup>。結果に結びつかない7、8も同様である。また、結果を伴わない9、10では、5歳で複合過去が増え、6歳以降は現在形が再び増える。しかし先にも述べた通り、現在形を規則的に使う6～7歳児は、人形のお芝居を見ている最中に文章化を行うからである。この点を考慮に入れてさらに詳しく分析すると、6歳頃には行為の性質に関係なく1～10すべて

21) Bronckart, p.108のグラフによると、3歳では複合過去使用がほぼ85%、現在形が10%。7歳では複合過去55%、現在形40%。

また、動作が終了するまでにかかる時間に注目すると、4歳の子もだけが、動作終了までの時間が長い4～6に対して半過去を用いる傾向が顕著に見られる(Bronckart, p.109のグラフ参照)。4歳頃に、アスペクト用法(行為の展開の方に注目する)半過去が一時的にあらわれるのかもしれない。

で複合過去を用いる割合が増す。Bronckart は、この複合過去を「時間的用法」の始まりだと考えた<sup>22)</sup>。

les temps du verbe assument une fonction essentiellement aspectuelle avant 6 ans, essentiellement temporelle après 6 ans, tout en conservant un rôle d'indicateur des nuances aspectuelles extrêmes. (Bronckart, p.118)

ただし、行為終了までの所要時間の長短は、7歳児においても若干動詞選択に影響を残している。Bronckart, p.109のグラフを見ると、7歳児は、1～3（所要時間1秒）に対して、複合過去60%、現在形35%、半過去5%を用いており、4～6（所要時間10秒）に対して、複合過去48%、現在形38%、半過去14%を用いている。

「実験4」では、人形で演じる場面終了から語りはじめるまでの時間を子どもたち自身に自由に選ばせた。この実験では、特に新しい傾向や変化は見られなかった。

#### 3.2.4. 「実験5」、「実験6」について

「実験5」の対象は11歳から13歳の児童30名（Bronckartはこのグループを«adolescents»と名付けた）、「実験6」の対象は大学生38名（同じく、«adultes»）である。口述ではなく、筆記による回答とした<sup>23)</sup>。また、「実験3」の倍以上に当たる22場面（人形で演じる行為）が用意された。11

22) 3～5歳の幼児の中にも、複合過去だけで実験内容を報告する子どもたちが相当数いたことを忘れてはならない。また、現在形を一貫して用いる6～7歳児の分析も不明瞭である。「6歳頃に時間的用法が芽生える」と結論するためには、彼の調査だけでは科学的根拠に乏しいと言わざるをえない。さらなる追跡調査が待たれるところである。

23) 「話す」ことで得られた実験サンプルと「書く」ことで得られた実験サンプルを単純に比較検討することはできない。著者も断っている通り、「実験5・6」は、これまでの実験結果を補足する参考資料として行われている。

歳から13歳の児童の半数が、そして大学生では実に82%の被験者が、すべての実験内容を現在形で報告した。6～7歳のグループの28%が現在形を終始一貫用いていたことを考えると、年齢が上がるにつれて、この傾向はさらに強まると結論される。また、結果を伴う行為であるかそうでないかは、11歳になると動詞の時制選択には全く影響を与えなくなる。動作終了までにかかる時間の長短だけがわずかに動詞選択に影響を残している。

### 3.2.5. Bronckart の実験結果のまとめ

以上、6つの調査結果から、Bronckartは、次のように結論する。

**3歳半未満**：動詞は行為そのものを示すだけである（時制もアスペクトも示さない）。まれに、現在形や半過去が「結果を伴わない行為」に対して用いられることもあるが、これは *degré d'accomplissement*（結果状態の方に注目するか、それとも展開中の行為そのものの方に注目するか）を示すアスペクト用法の萌芽であると解釈される。

**3歳半～6歳**：結果状態に注目するならば複合過去が、展開中の行為の方に注目するならば現在形（もしくは半過去）が用いられる。

**6歳～8歳**：行為終了後すぐに語る場合には現在形が、25秒経過してから語る場合には複合過去と半過去が用いられるようになる。つまり、動詞時制が行為の起こった時間を示すようになる。ただし、*degré d'accomplissement* を示すアスペクト用法も残る。

**11歳～13歳**：時間的用法が優勢となる。

実験内容（おもちゃを使って演じられる行為）が各実験で異なったり、報告方法（「話す」と「書く」）が各年齢で統一されていなかったり、一部のデータの数値が示されていなかったりする欠陥はあるものの、彼の調査から、フランス語母語話者はまずアスペクト用法から習得し、時間的用法が定着するのは、6歳頃であることがわかった。

#### 4. 最後に

Bronckart は、実験結果と、語史やクレオール語・俗語・手話の形成過程を比較して、次のような指摘を行っている。

Le processus de passage de l'aspect au temps a été décrit dans le développement historique des langues (...), dans l'évolution de l'argot à la langue-cible au travers des stades successifs de langue créole (...), et même dans la création et l'évolution de systèmes de signes chez les sourds (...). L'existence d'une «période aspectuelle» précédant l'élaboration des relations temporelles semble bien présenter un caractère de nécessité

(Bronckart, p.141)

どうやら、言葉の成り立ちそのものも、子どもの習得過程と同じく、まずアスペクト用法から始まるようである。もし、Bronckart の指摘が正しいのであれば、アスペクトを出発点とする Beauzée の時制論は示唆に富むものであったと言えよう。

また、フランス語教育の場においても、母語話者が動詞アスペクトから習得するのであれば、我々もそれにならって現在形との対比で半過去を導入すれば、よりスムーズな授業展開が期待できるかもしれない。外国語学習のプロセスとネイティブの子どもの言語獲得プロセスを比較することは、効果的な学習プログラムを探る上で数々の貴重なヒントを与えてくれるのではないかと思われる。今後の課題としたい。

(本学非常勤講師)